

京林大だより

No.6



絵:京林大生 熊走君

高性能林業機械操作実習を実施

近年、林業の現場では、生産性や安全性の向上を目的として、高性能林業機械の導入が飛躍的に進んでいます。そこで、京林大でも高性能林業機械の操作技術を習得した人材の育成を重要な教育理念のひとつとして位置づけ、指導に取り組んでいます。

1月から2月にかけての延べ10日間、京丹波森林組合の方々のご指導のもと、京丹波町升谷の京丹波町有林で高性能林業機械操作実習を実施。立木のチェーンソーによる伐倒から始まり、スイングヤードによる運搬、グラップルによる土場整理の各作業を5班体制で行いました。

雪の中での実習も何度かありましたが、生徒達は寒さをものともせず、各自で課題を見つけながら実習に励んでいました。



.....



「しいたけ菌打ち体験」に参加

3月10日日曜日、京丹波町下大久保の地域活性化を目指す活動組織「下大久保虹の村づくりの会」主催の里山交流イベント「しいたけ菌打ち体験」が行われ、京林大生の高崎君、船越君の2名が参加しました。

このイベントで使用された原木は、昨年12月、同会と京林大が共同で伐採をしたもので、2人は自分たちが伐採した原木が地域の活性化の取り組みに結びついていくことに感慨深げな様子でした。

ご寄贈ありがとうございました



只木校長のご友人である中村八郎氏が、本校に書籍と本棚を寄贈してくださいました。これに感謝の意を表し、3月5日の「京都・林業会議」において、山田知事から感謝状を贈呈しました。中村氏は、林大生たちが有効に活用して、勉学に励まれることを期待されていました。

京林大のヒミツ

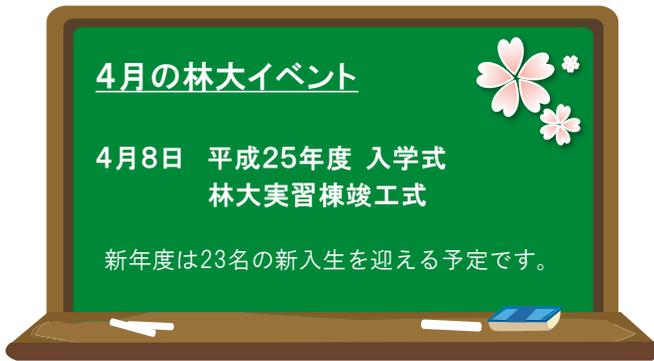
— 講義室に響くドイツ語 —



昨年春入学した林大生も、今年ではや2年生。京林大2年生の一大イベントといえば、6月に行われる5泊8日のドイツ研修です。研修では林業先進国であるドイツの林業大学校での実習や、森林・林業施設の訪問・視察を予定しています。

現在、京林大生たちは研修に向け、ドイツ語を学習中。一般的な日常会話の他に、森林や林業の用語を集中して学ぶのは、やはり林大ならではの、といったところでしょうか。

研修へ意気込む京林大生たち。講義室にドイツ語が響きます。



校長室より

右近の橘、左近の梅

3月3日雛祭り。拙宅の雛飾りは、向かって右に内裏様の京都式。全国的には、向って右にはお雛様が通例になっていますが。雛壇を飾る右近の橘、左近の桜、内裏様から見て右・左、これは御所紫宸殿の造りを模したもので、この左右は全国共通です。なお、「近」は近衛府の陣を敷く場所を意味するとか。

橘(タチバナ)は常緑で長寿瑞祥の木がその由縁、では桜(サクラ)は、というと実は昔は「左近の桜」ではなく、なんと中国伝来の梅(ウメ)、つまり「左近の梅」だったというのです。

サクラはわが国自生種、ウメは中国原産の移入種です。古い時代、中国はわが国にとっては何かにつけて先輩の先進国、憧れの国でした。上層階

級・文化人たちにとって、その国から到来した梅を庭など身の回りに植えることは、ステータスシンボルだったに違いありません。事実、わが国最初の勅撰歌集の万葉集には、梅118首、桜44首とウメが圧倒的に多いのです。

で、平安京も創建(794年)当初は「左近の梅」でした。その後、梅をこよなく愛した菅原道真、「木の花は濃きも薄きも紅梅」と記した「枕草子」清少納言などの例もありましたが、「古今和歌集」には桜が70首、梅が18首と、人気は徐々にサクラに移り、平安時代後半には「花といえば桜、祭りといえば賀茂の祭り」の世となりました。御所の左近の梅も960年の内裏火災の後、左近の桜に植え替えられたもののようです。

(校長 只木良也)